歴女・歴男あつまれ１

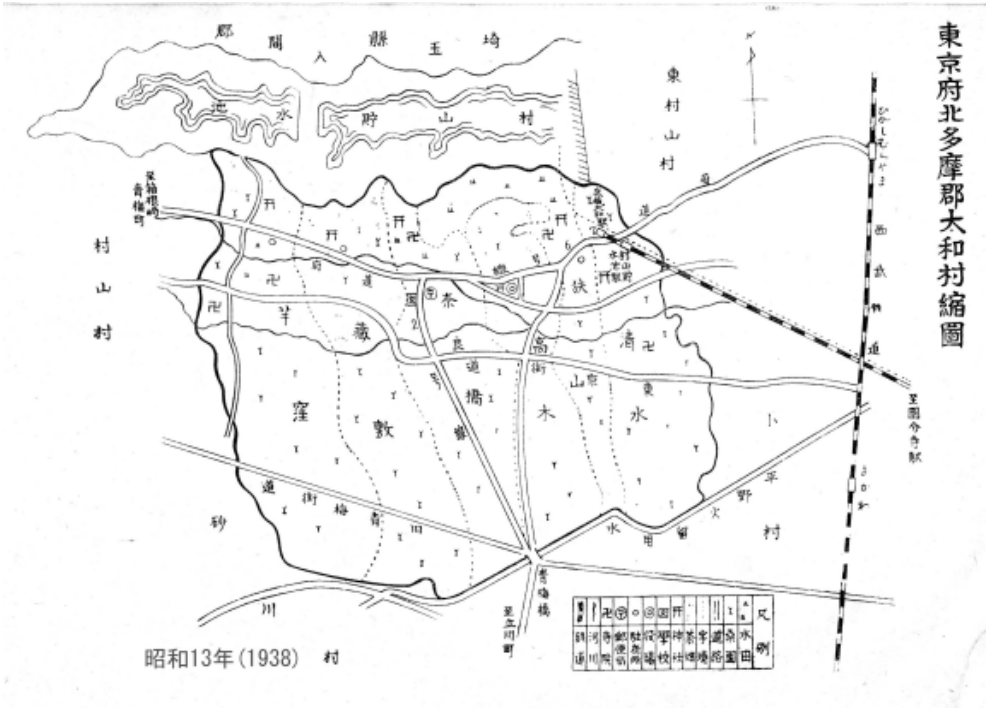
東大和市の歴史を知る

2016.06.02.

はじめに

東大和市の歴史をたどり、次の時代を育む

●東京都のなかでの位置



Ⅰ東大和市は海の中（地質時代）

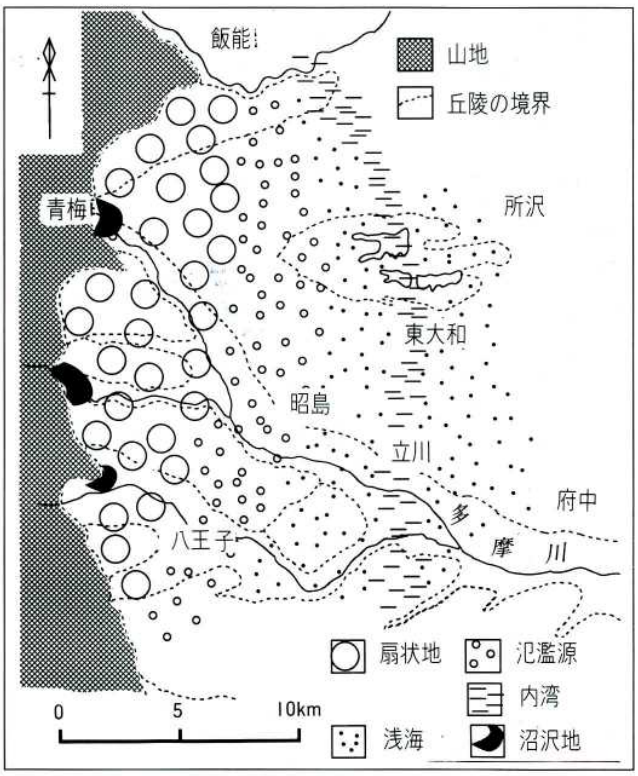


図８　関東平野西部の昔の様子
（50～200万年前）

出典　（東大和市史資料編５ p36）

マガキ（村山貯水池工事の際発掘）

ヒメアサリ（第一中地下 224 メートル）

狭山丘陵が海の渚だったとはなかなか信じられませんが、東大和市史資料編５では次のように説明しています。（p36）

「狭山丘陵の西部から拝島、八王子にかけての地域に河川の氾濫原と考えられる環境が広がっていた。さらに東の狭山丘陵中部から昭島～日野にかけての地域には浅海が広がっていた。東大和市は大部分この浅海の環境であったが、ときどき海が浅くなって、礫やマガキの化石を含むような泥層が堆積した。その後、芋窪礫層が堆積するころには陸化し、現在の多摩川の河原のような環境になり、火山灰が厚く降り積もったと考えられる。」

東大和市の地質時代を知る宝庫は第一中学校北側の「地盤沈下観測所」にあります。

東京都の施設で、地下 92、175、260 メートルの 3 本の深井戸を掘り地盤の沈下量と地下水の水位を観測しています。

この深井戸を掘る際に、地層の各階層から上に紹介した貴重な貝殻などの化石が発見されました。

「地盤沈下観測所」に表示されている武蔵野台地の地形の説明です。
東大和市立郷土博物館にも地形の説明図が展示されています。

1 芋窪礫層と多摩ローム

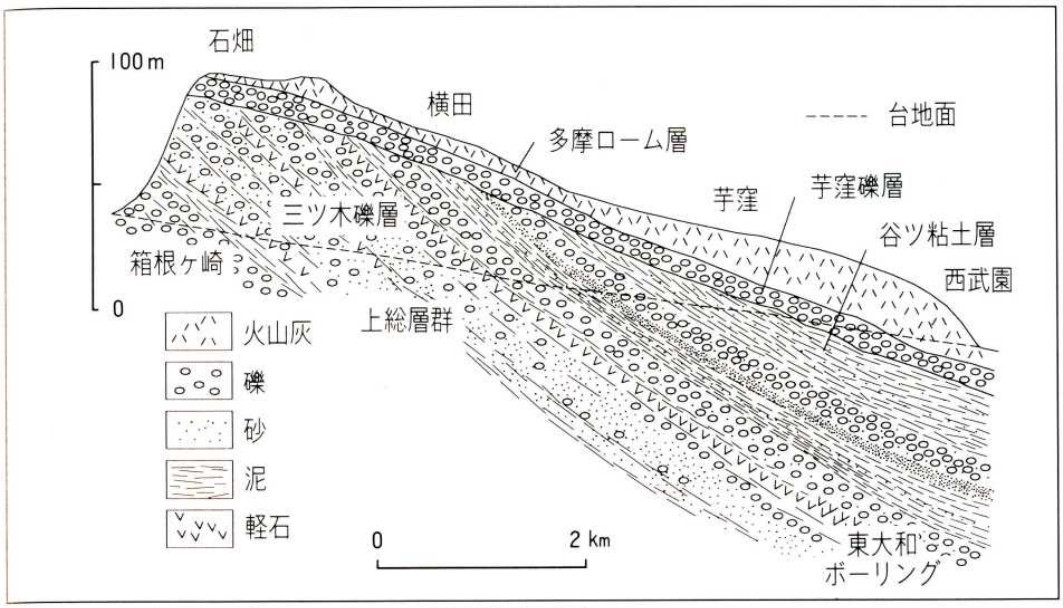


図５　狭山丘陵及び地下の地質断面図

（出典　東大和市史資料編５ p28）

（1）芋窪礫層

東大和市周辺の狭山丘陵の主体部を構成する、古多摩川が運んで来た礫層を見ることができます。

画像は蔵敷　熊野神社の本殿裏側に露頭する芋窪礫層ですが、村山貯水池の中にも見られます。

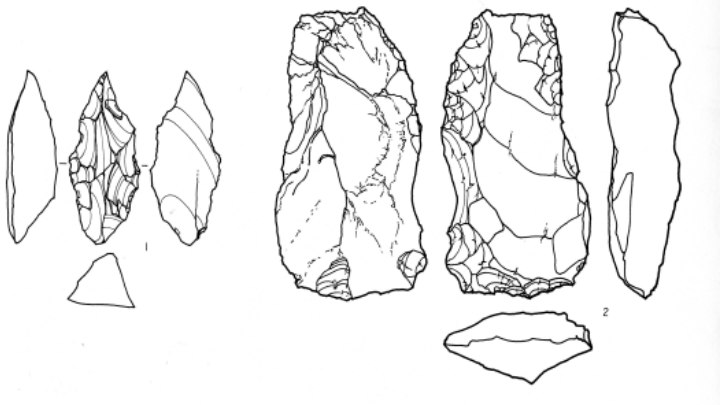
（2）多摩ローム

狭山丘陵の表面を覆う地層です。多摩丘陵、加住丘陵、草花丘陵、加持丘陵も同じ地層で覆われています。古多摩川が狭山丘陵を削り残した謎解きの鍵です。

芋窪の鹿島台（豊鹿島神社北側）からは多摩丘陵が遠望され武蔵野台地の生成に興味をそそられます。

Ⅱ空堀川のほとりでキャンプ（旧石器時代）

約 2 万年前あたりから、東大和市に人が住み始めました。狭山丘陵から、武蔵野の原野にかけて移動生活を送っていたと考えられます。その痕跡が狭山丘陵と空堀川周辺で発見されています。



礫群の一部

バーベキュウの跡か？
丸山遺跡

土器は使用せず、石器の生活でした。上画像は左が多摩湖第 11 遺跡出土石器です。左　ナイフ型石器　右　削器　（出典東大和市史『資料編 3』p125）

高木の街道内遺跡から、槍形（左）や石器を削り取ったあとの石核（右）と呼ばれるものがが出土しています。無土器の時代で、狩猟を丘陵や原野、キャンプを川辺で行ったのでしょう。

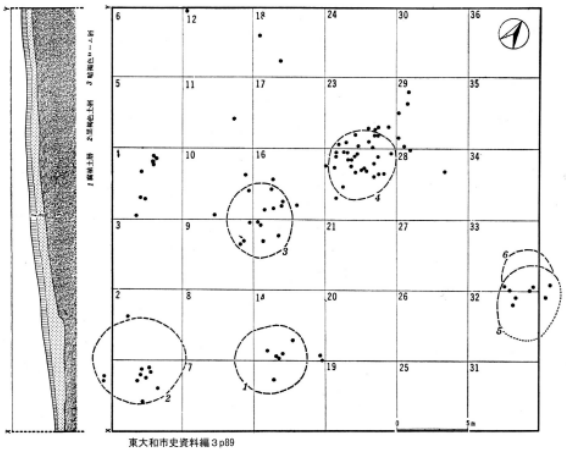
Ⅲ 縄文銀座（縄文時代中期）

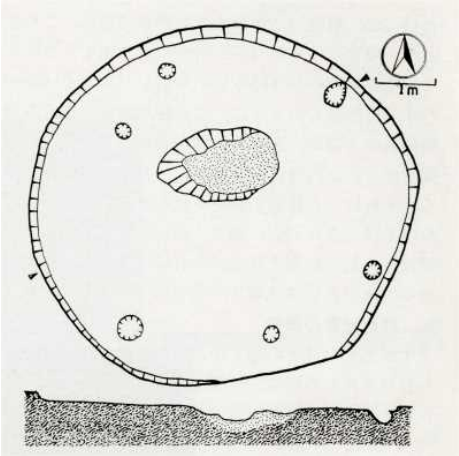
関東地方の縄文時代については、いつから始まったかを巡って、1 万 3 千年を初めとして多くの説があります。東大和市の遺跡からは、約 6 千年前から始まり、5 千年位前に最盛期を迎え徐々に衰退することがわかっています。最盛期は縄文時代中期で狭山丘陵の多くの地域から遺跡が発掘され、縄文銀座の名で呼ばれます。狩猟・採集の時代です

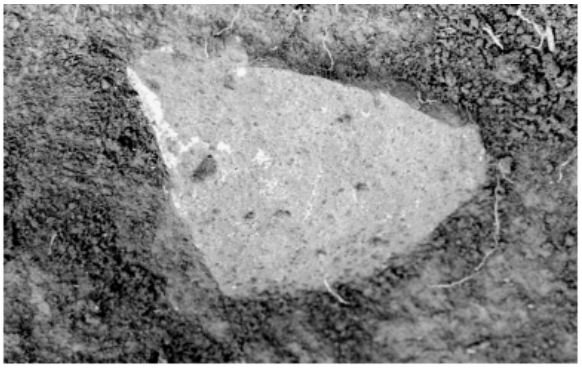
諏訪山遺跡

現在の奈良橋の丘陵部から湖畔二丁目にかけて（画像左側）、まとまった遺跡が発掘されています。

土を 30 センチほど掘り、直径約 6 メートルの円形の竪穴住居跡が 11 戸確認されています。中央にいろりが掘られ、柱あとから円錐形の屋根が設けられていました。一部では住居址が重なってつくられており、一定の期間集団で生活が営まれていたことが推定されます。

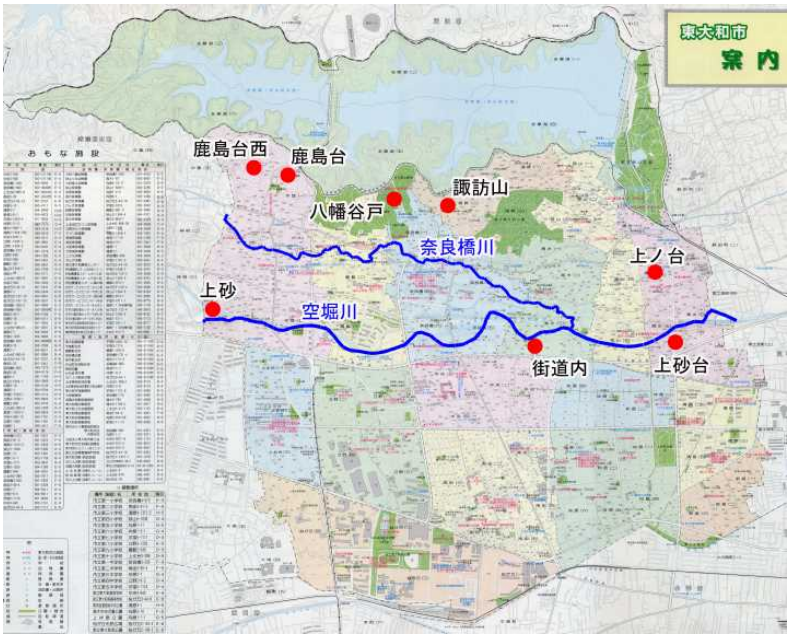






土器は壺を中心として多様化し、矢じり（鏃）や根菜堀、火おこし具等の石器が発見されています。

主な縄文遺跡

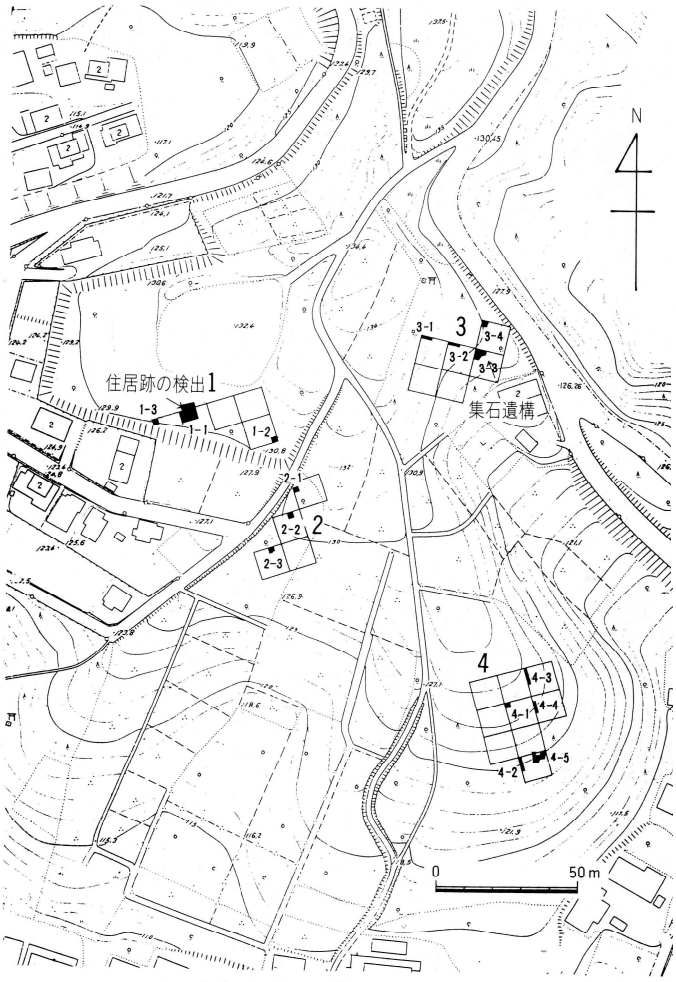


八幡谷ッ遺跡

大量の打製石斧

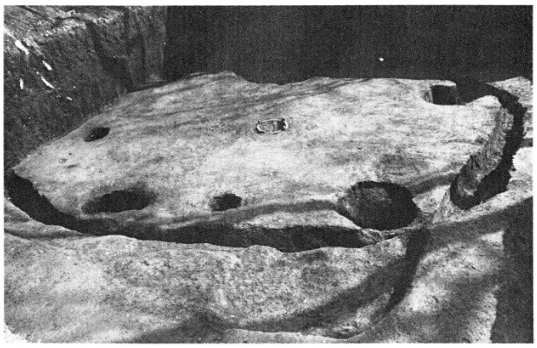
「石鏃」～石斧と違い数点しか見つからない

上　石器　下　矢じり

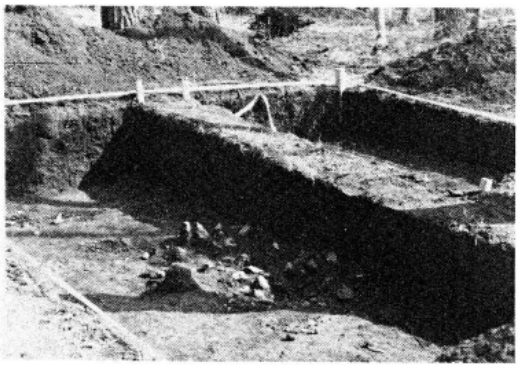


鹿島台遺跡に設定した調査区

鹿島台遺跡



第18図　住居跡全景



第８図　集石遺構

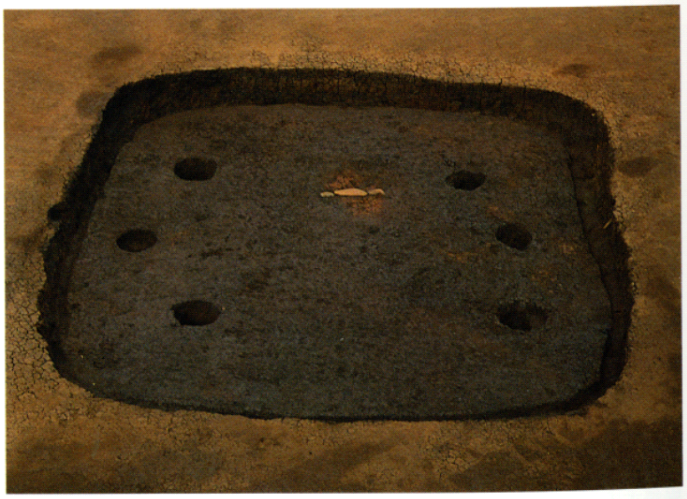
（出典東大和市史『資料編 3』）

Ⅳ 姿を見たい！（弥生時代）

米つくりが始まり、集落が定着する時期ですが、残念ながら東大和内では弥生時代の遺跡は発見されていません。年代も各論（紀元前後）あり、土器の対比論の段階で確定していません。

狭山丘陵周辺全体でも遺跡は少なく、近くでは、所沢市東上遺跡で 53 軒の竪穴住居の集落、日向遺跡で 15 軒の集落が発見されています。

壺型土器（宮前遺跡第34次調査第4号墓出土）



弥生時代の住居跡（日向遺跡第1次調査第5号住居跡）　ところざわ歴史物語p9

（出典　ところざわ　歴史物語 p9）

水田を耕作し、土器も多様化してきました。狭山丘陵の谷ッに、小規模ですが集団で生活し居所が定着してきました。

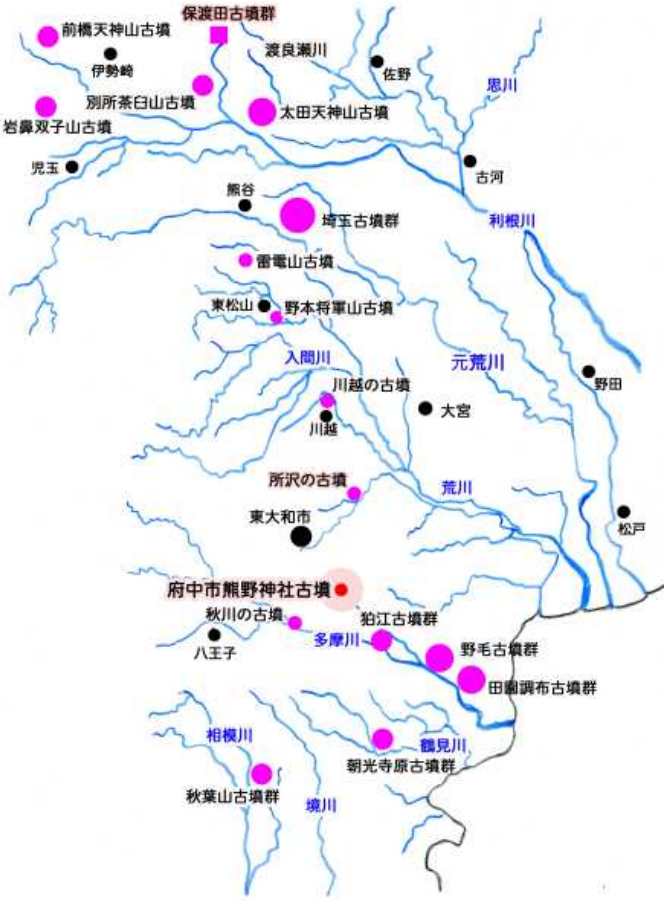
方形周溝墓（東の上遺跡第53次調査第1・2・3号墓）とことざわ歴史物語p9

集団に階層が生じ、墓にも方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）と呼ばれる特殊な形が生まれ、指導者が葬られるようになりました。

V いよいよ定着(古代)

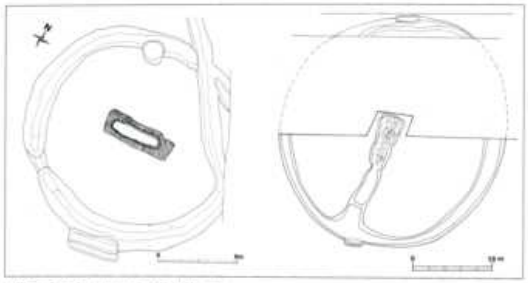
1 古墳時代

3 世紀後半から 7 世紀にかけて、武蔵では大規模な古墳が築かれ、従来とは異なった社会が成立します。古代史を彩る有力な古代氏族が出現する武蔵の古墳時代です。



鉄剣出土の稲荷山古墳（埼玉古墳群）

ところが、左図の通り、東大和市も含め狭山丘陵南麓ではその気配はなく、所沢に小規模な古墳が築かれました。



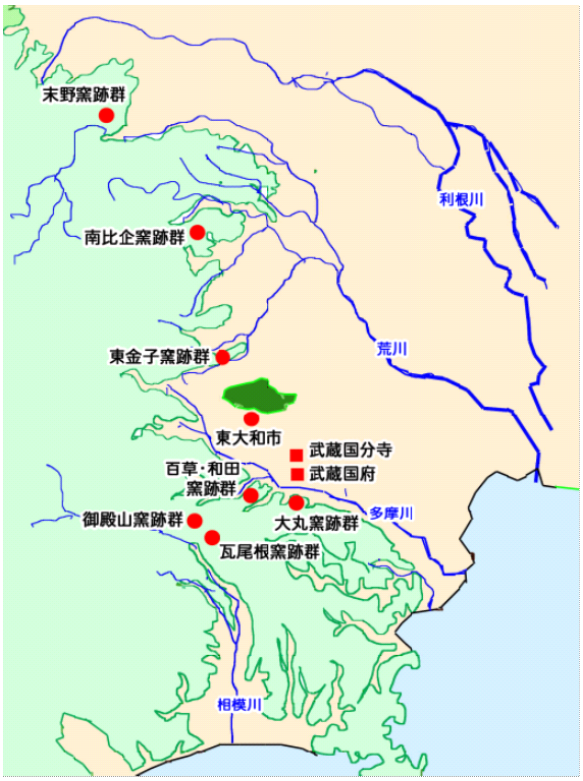
山下後第1号墳（左）と海谷第2号墳（右）
山下後第1号墳は主体部が竪穴式で、被葬者は一人だけである。一方、海谷第2号墳は羨道を持つ横穴式で、追葬が可能である。

（出典ところざわ歴史物語 p11）

山下後、海谷古墳で、中央部に埋葬施設をもちます。海谷古墳は追葬可能な横穴墳でした。

一方、多摩川流域には 100 メートルを超す大規模古墳から渡来系の色彩◆をとどめる古墳まで多様性を持った古墳群が集中します。7 世紀中葉から後半に上円下方墳である熊野神社古墳が府中市につくられ、武蔵国府の誕生を迎えます。

2 国府・国分寺



大化元年(645)、大和朝廷は東国国司を任命し、東海、東山、北陸の国々に派遣しました。そのルートは古代の道路として整備されました。所沢市東の上遺跡に道路遺構が残り、7 世紀第 4 四半期の

土器を伴出しました。600 年代後半に東山道武蔵路ができたことを示します。派遣された国司の執務の場として武蔵国府が建設されました。8 世紀前葉とされます。時を同じくして武蔵国分寺が建立されました。8 世紀中頃とされます。東金子窯跡群から瓦を運んだルートも考えられますが不明です。

３ 廻田谷ッの開発

やがて、時期は確定されていませんが、東大和市域にも竈を持つ家がつくられました。村山貯水池の中、清水神社と空堀川の間、現・湖畔二丁目地域などです。（出典　東大和市史『資料編 3』）

廻田谷ッ遺跡、竪穴住居ですが、東西 3 メートル、南北 4 メートルの長方形で、東側の壁に竈が設けられていました。画像右は自然の釉薬がかかった土器です。平安時代末のものと考えられています。

遺跡や出土した土器などの状況から、後に、廻田田んぼと呼ばれる水田が営まれたことがわかります。大家族が集中して住むのではなく、小家族が散在して生活を営んでいたと推測されます。

755 年にまとめられた万葉集・東歌に

武蔵野の小岫（おぐき）が雉（きじし）立ち別れ
去（い）にし宵より夫（せ）ろに　逢はなふよ(14 ー 3375)

が採録されていますが、これに近い村人達の生活が目に浮かびます。

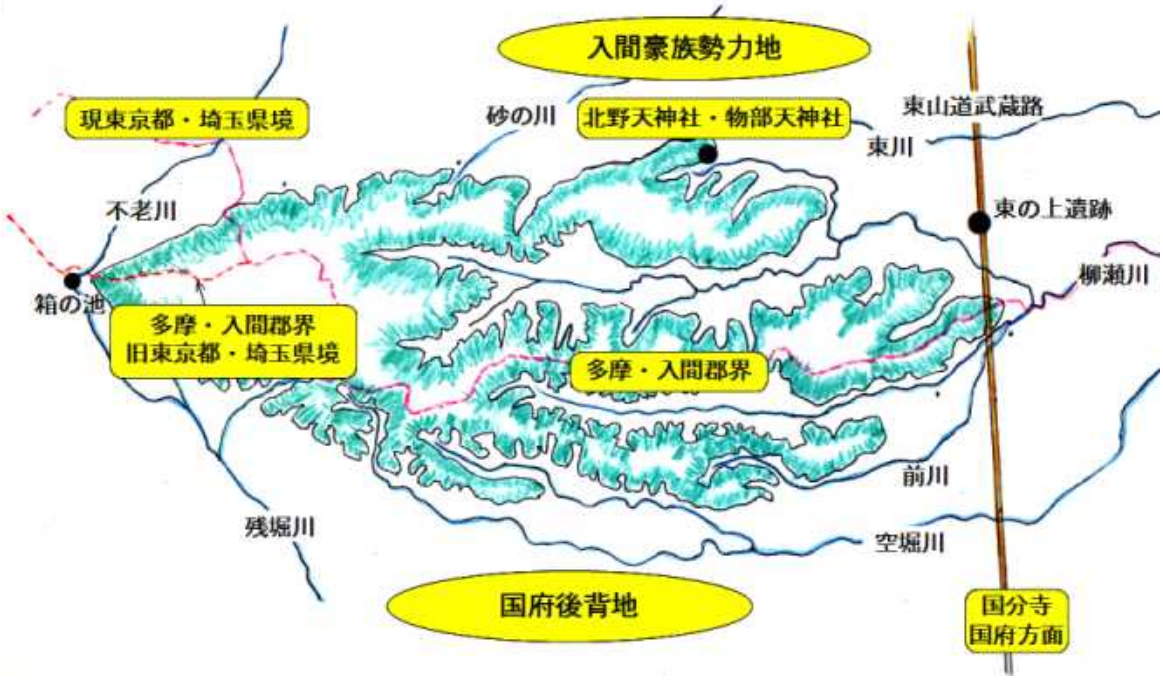
4 多摩・入間・の郡界

日本書紀に、天武 12 年(683)～天武 14 年(685)にかけて国境画定作業に関する記述が続きます。

また、高麗郡が霊亀 2 年(716)、新羅郡が天平宝字 2 年(758)と入間郡をはさむように渡来系の人々が住む郡が新たに建郡されます。

東大和市域は北面を入間の豪族の支配地・入間郡と接し、南面は茫々たる一面の武蔵野の原野が広がる彼方に国府・国分寺を望む多摩郡に位置しました。

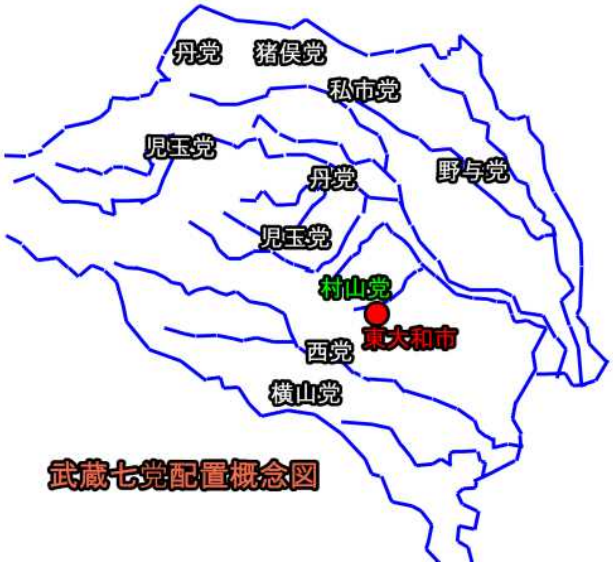
いつ境界が定められたかは不明ですが、狭山丘陵の峰を分けて、入間郡（現在の埼玉県所沢市）と境界を画することになりました。



北野天神社は物部天神社と呼ばれ、物部氏の支配地であったことが推定されます。東山道武蔵路は狭山丘陵の東端を走り、東の上遺跡は古代の駅であったことも想定されます。多摩入間郡界には非田所が設置されたことが伝わります。残念ですが東大和市域とどのような関係があったのか不明です。

Ⅵ 武士の登場(中世)

平安時代末、武蔵各地に武士団が形成されます。



武蔵武士の発生要因は
◎国府などの在庁官人
◎牧(馬の放牧)の管理者
からの出身が考えられています。
・武蔵国の在庁官人が土着して＝西党
・秩父牧(933　埼玉県秩父市）＝秩父氏
・石川牧（八王子石川　横浜市港北区元石川）
　立野牧(909　町田市、横浜市港北区)
　小野牧(931　多摩市　府中市)
　などの牧の指導者小野諸興＝横山党
　がその例としてあげられます。
◎村山党の村山氏は、その租となる人物は「貫首」と称し在庁官人の出であることを示しますが、出身は明らかではありません。野与党と同族とする意見もあります。

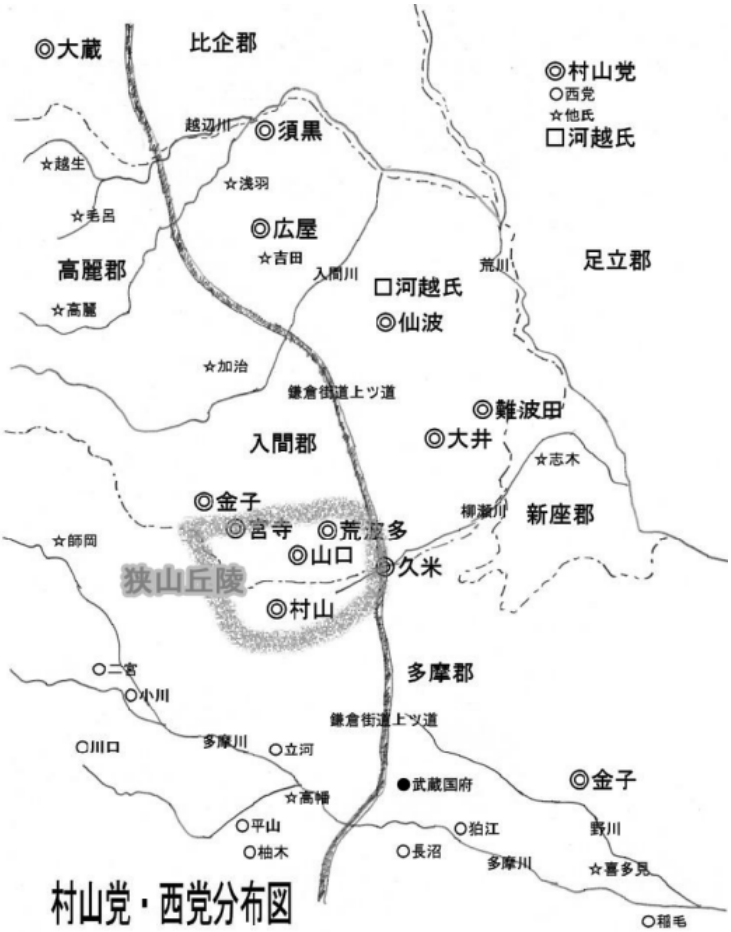
1 村山党・山口氏の定着

900 年代、狭山丘陵に村山党の一族が定着しました。その本拠は現・瑞穂町「殿ヶ谷」に置かれたとの説もありますが、確定していません。

村山氏はやがて、山口、金子、宮寺、荒幡多、大井、仙波、難波田氏などを分出しました。

山口氏は、現・所沢市山口に定着し、山口城を構えました。規模は東西 200 メートル、南北 200 メートルで、多郭式の平山城(館城)でした。さらに、応永年間（1394 ～ 1427)、山口貯水池に沈んだ勝楽寺地域に根古屋城を築きます。中世の山口郷が成立します。

東大和市域は山口氏の居住地と嶺を分けて隣接する地域ですが、その支配下に入ったのかどうか、実態は不明です。後に紹介しますが、東大和市域には、狭山丘陵東部の大きな谷ッの一つに宅部郷、南麗の一部に奈良橋郷がありました。



村山党の武士達は治承 4 年(1180)、頼朝の挙兵時には平氏方につきましたが、その後は忠実な東国武士として活躍し、基盤を固めました。『保元物語』『源平盛衰記』『吾妻鏡』などに名を連ねています。山口氏は、1300 年代末に一時、力を落としましたが、1500 年代には再興し、土地の豪族として或る程度までは勢力を保つようになりました。徳川時代には家康の家臣となっています。

2 東大和市域に寺社の創建

平安時代末期、狭山丘陵南麓に寺社の創建が続きます。

・豊鹿島神社
　慶雲 4 年(707)創建伝承
　文正元年(1466)本殿創建棟札
　都内の室町神社建築最古
・御霊明神社
　康平 6 年(1063)創建伝承
　村山貯水池建設により狭山神社に合祀
・氷川神社
　健保 2 年(1214)創建棟札
　村山貯水池建設により清水神社に合祀
・三光院
　開山　円長　天永 3 年(1112)寂
・円乗院
　開山　賢誉　平治元年(1159)寂

豊鹿島神社本殿
(出典　豊鹿島神社本殿修理工事報告書)

３ 狭山丘陵に阿弥陀信仰・板碑

13 世紀に入ると、狭山丘陵周辺には秩父産の青石でつくられた「板碑」がまつられます。生前に死後の安泰を祈ったり、死者の供養をしました。「青石塔婆」とも呼ばれます。その特徴は

多くが「阿弥陀如来」を彫り込み、浄土教の信仰が広まっていたことが推定されます。東大和市内で、最古は永仁 2 年(1294)、最後は天文 11 年(1542)の板碑が確認されています。

板碑の発見は土に中に埋められた物が多く、東大和市最古の永仁の板碑も円乗院と雲性寺の間の谷から発見されました。

右画像は、武蔵村山市の貴重な証言でした。

４ 中世の村・郷

中世の村がどのような姿をして、村人達はどのような生活を送っていたのでしょうか？
二条の日記『とはずがたり』では、信濃善光寺からの帰途、通った武蔵野の様子を

「萩・女郎花・荻・芒よりほかは、またまじるものもなく、これが高さは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば、おしはかるべし、三日にや分けゆけども、尽きもせず、ちとそぼへ行く道に宿などもあれ、はるばると一とほりは、来し方行く末野原なり、」

これは正応 2 年(1289)の北武蔵野の景観です。恐らく、狭山丘陵南麓に広がる武蔵野も同じような姿と推測します。

200 年ほど後、聖護院門跡道興准后（しょうごいんもんぜきどうこうじゅごう）の『廻国雑記』に、文明 18 年(1468)、道興准后が所沢から久米川に宿泊したときの記録があります。

「ところ沢といへる所へ遊覧にまかりけるに、福泉といふ山伏、観音寺にてささえ（竹筒）をとり出しけるに、薯預（しょよ　長芋）といへる物さかなに有けるを見て、俳諧、

　野遊の　さかなに山のいもそへて　ほりもとめたる　野老沢かな

この所を過てくめくめ川といふ所侍り。里の家々には井なども侍らで、ただこの河をくみて朝夕もちひ侍となん申ければ、

里人の　くめくめ川と　ゆふくれに　成なは　水はこほりこそせめ」

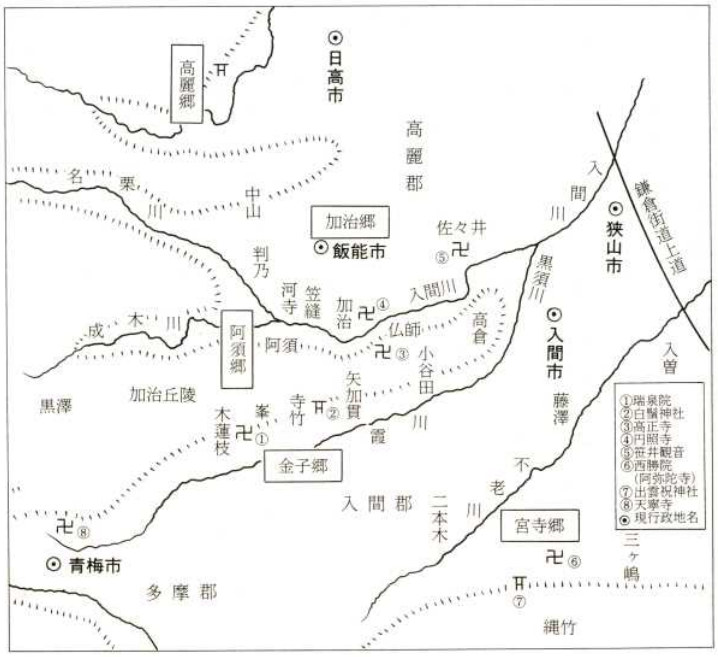
と 1468 年の段階で､鎌倉街道街の道筋に成立した所沢では貴重な客をもてなすに際して、長芋が酒の肴で、久米川宿では井戸もなく久米川の水で生活する状況が画かれています。

5 谷ッへの散在

東大和市域にあっては狭山丘陵の際を縫うように村山道が走り、丘陵の谷筋に数戸の家々が散在して集落を形成していたのではないかと推定されます。

その姿は現在でも、狭山丘陵の一部で接することができます。左画像は､芋窪の「西谷ッ」の現況です。

しかし、すでに村が成立している地域もありま



第4－6図　中世郷村略地図

（出典　入間市史 p309）

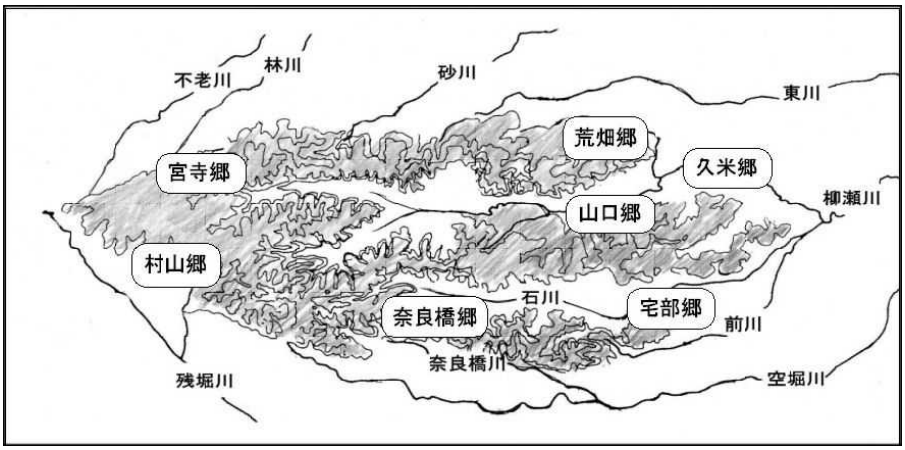
した。狭山丘陵西方の入間市では宮寺郷のもとに「縄竹村」の名が歴応 2 年(1339)に阿弥陀寺に宛てられた寄進状に記されています。

不老川、霞川、成木川、入間川の流域に形成された地域で武蔵武士の金子氏、宮寺氏、加治氏などが活躍しました。戦乱に巻き込まれ、そのため、一族の結束も固く集落の形成が行われたものと考えます。それらの指導者の名を冠する郷のもとに村が成立していました。

このことからすれば、東大和市内でも何らかの村の表示がなされていたことも考えられます。当時の東大和市域の例では、現在の狭山、清水に相当する地域に「宅部美作入道貞阿」の記載が残されています。正平 23 年(1368)の記録で、村名の独立までには至っていないようです。

6 狭山丘陵の郷

（豊鹿島神社）パンフ）



狭山丘陵一帯の中世の郷は上図の通りですが、東大和市域の属する奈良橋郷は豊鹿島神社本殿の創建棟札から確認されました。

「文正元年(1466)十月三日」

「武州多東郡上奈良橋郷　本大旦那源朝臣憲満」

「当別当　梅満命姉　大工二郎三郎近吉」

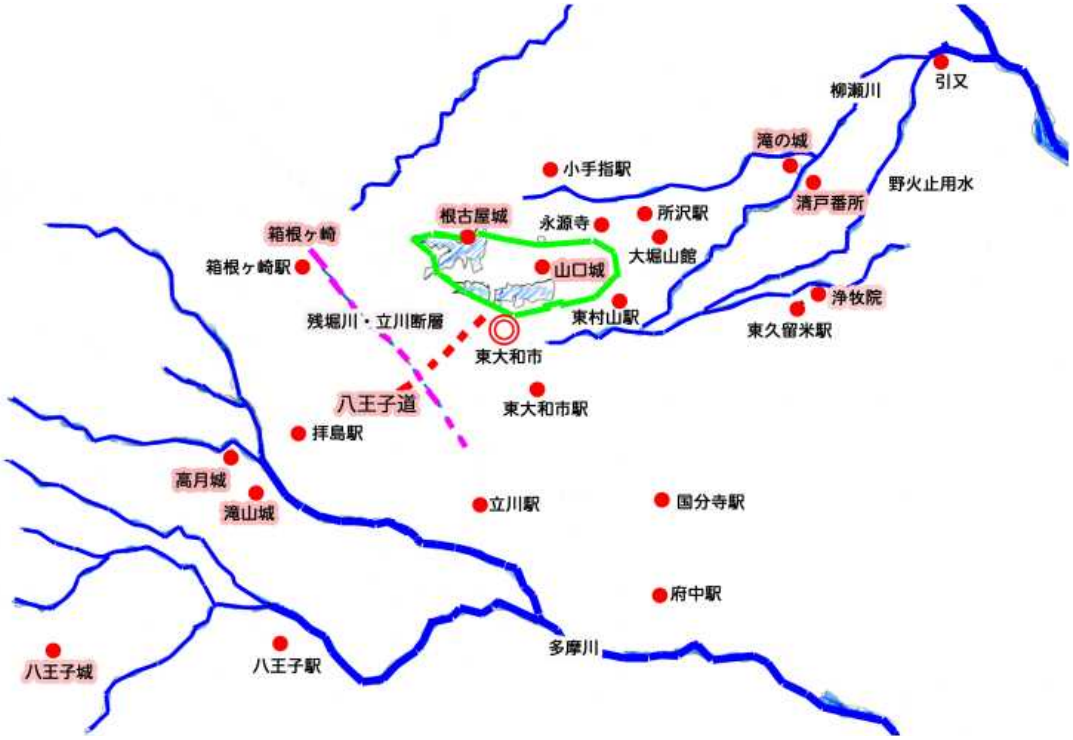
と墨書されています。他の文献などに奈良橋郷は、現在の所、見いだされていません。この棟札により初めて東大和地域は奈良橋郷と宅部郷に含まれていたことが明確になりました。

7 多くの戦乱

中世の武蔵は戦乱に明け暮れ、東大和市域もその影響下にあったと考えられます。

・平安末期　前九年・後三年の役　康平 6 年(1063)御霊神社創建の伝承(村山貯水池に沈んだ内堀)
・鎌倉時代　治承 4 年(1180)頼朝が旗揚げ　村山党が活動　鎌倉幕府の成立、八幡神社東側道路が鎌倉道との伝承あり　承久 3 年(1221)の乱には、山口氏は武蔵武士の一員として北条氏につきました。以後、北條氏の統治
・南北朝時代　元弘 3 年(1333)新田義貞鎌倉攻め、久米川の合戦　建武 3 年(1336)銘の鐘が豊鹿島神社に存在したと伝わります。南北朝合戦には山口氏が足利氏と戦う
・室町時代　上杉氏や大石氏が活躍　山口氏が根古屋城を築城　文正元年(1466)豊鹿島神社本殿創建　文明 9 年(1477)太田道灌村山に陣
・戦国時代　後北条氏が台頭、関東を統治　明応 3 年(1494)伊勢宗瑞久米川着陣
天文 20 年(1551)頃より、北条氏　八王子城から武蔵を統治、東大和市も支配下に入る
天正 18 年(1590)年 6 月 23 日、豊臣秀吉軍が八王子城を開城

◎八王子との関係は江戸時代から明治に続き、現在もその道路の一部が残されています。今講座中に現地を訪ねます。



8 戦国時代の山口氏と北条氏照領

後北条氏の武蔵進出に伴い、山口氏はその軍門に降ったとされ、後北條氏の家臣団に編入されていいます。永禄 2 年(1559)に作成された『北條氏所領役帳』には山口内として

大鐘(上山口)、藤沢分(入間市)、北野分（北野地区）

が限定された所領地として記されています。

この時、東大和市域は北条氏照の「滝山・八王子領」に含まれたのか、特定の支配者が居たのかは不明です。

Ⅶ 村ができた(江戸時代)

1 早々と送られてきた家臣

第 8 表

村名	村高	知行人・代官	知行高 支配高
芋久保村	380.石	酒井極之助 酒井郷蔵	170石 210
奈良橋村	330.	石川太郎左衛門	330
高木村	70.	酒井極之助 酒井郷蔵	30 40
清水村	300.	浅井七平	300
後ヶ谷村	300.	溝口佐左衛門 辺見四郎左衛門	150 150
廻り田村	500.	中川佐平 富田平之亟	300 200
野口村	584.9斗	※今井八郎左衛門	584.9斗
久米川村	132.1.5升	※今井八郎左衛門	132.1.5升
南秋津村	96.6.8.5合	※今井八郎左衛門	96.6.8.5合
野塩村	113.	向坂与八郎	113
宅部村			

※代官

天正 18 年(1590)7 月、秀吉の後北条氏制圧＝小田原合戦終結に伴い家康は三河から関東への移封を命じられます。

家康は帰国せず、その年の 8 月には江戸に入ったとされます。その翌年、天正 19 年(1591)から、家康は直属の家臣を狭山丘陵周辺に派遣してきました。東大和市域には左表の家臣が地頭として着任しました。江戸の整備が整わず、家臣は村にに家族とともに住み、江戸城へは通勤登城しました。

派遣された家臣には「宛行状」(あてがいじょう)が交付され、東大和市域では「芋久保・芋窪」「奈良橋」「高木」「後ヶ谷」「清水」の村名が書かれていました。知行＝村高が調整され、散在していた集落が一定の範囲で集められて「村」が決められたと考えられています。これを「村切り」と呼びます。(出典　大和町史研究 3p9)

村に配属された地頭は馬で、江戸城へと通勤登城しました。武蔵野の原野の中を一筋に走る道です。やがて、江戸市中の整備が始まると青梅・成木からの石灰の運搬の道となりました。東大和市域では江戸街道、青梅街道と呼びました。箱の池から田無まで一面の原野で、家は一軒もありませんでした。

２ 玉川上水・野火止用水の開削

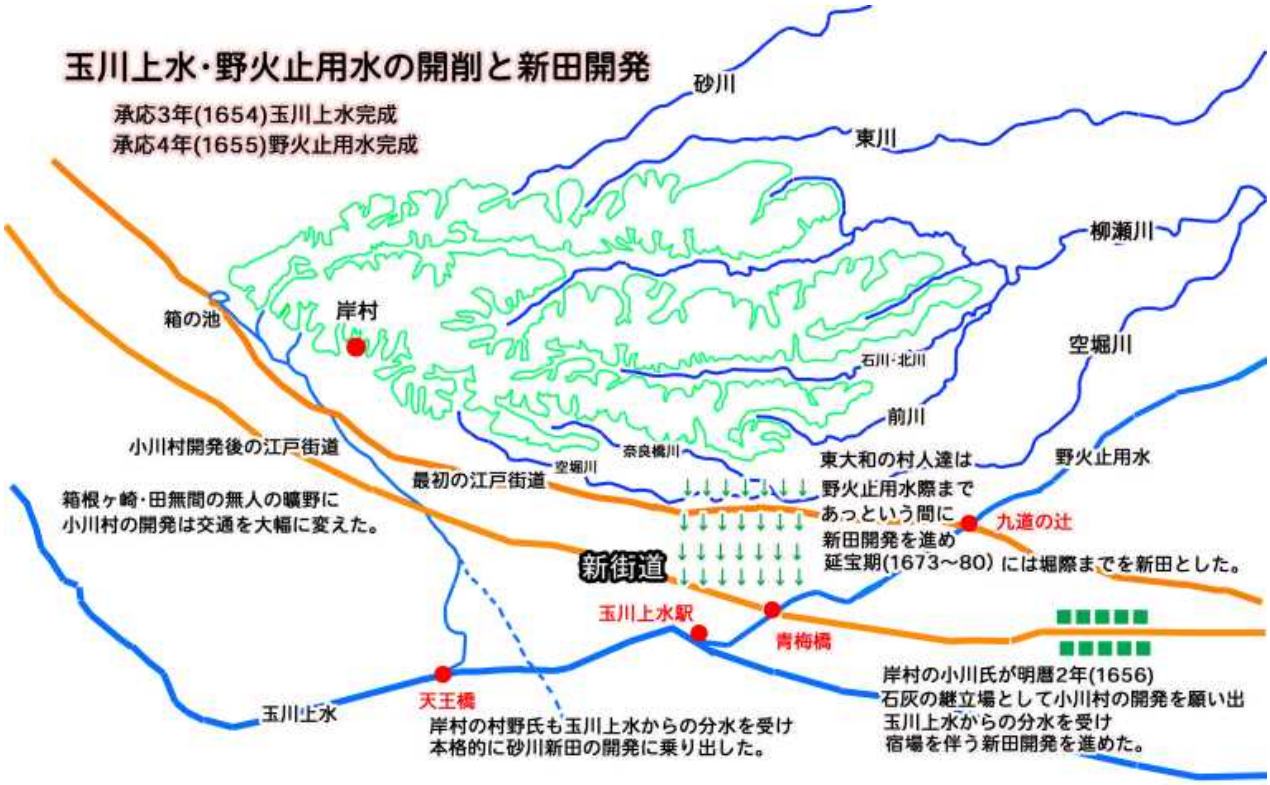
江戸市中の整備が進んで約 60 年経過、参勤交代が制度化され、江戸市中の人口は増加し、それまで、神田上水と溜池(赤坂)の水でまかなっていた飲料水が不足するようになりました。老中・松平信綱が中心になって多摩川からの飲料用の上水路の開削を検討します。

・承応 2 年(1653)、4 月 4 日、工事開始
・承応 3 年(1654)6 月 20 日、玉川上水完成

の突貫工事で玉川上水が開削されました。松平信綱は褒美に 3 割の水を自領の野火止へ引くことを許されます。これも

・承応 4 年（1655）2 月 10 日、着工
・承応 4 年（1655）3 月 20 日、完成(閏月を挟む)

の突貫工事で開削されました。信綱は玉川上水開削と前後して野火止地方に新田開発の農民を移転させる手際よさでした。その後多くの分水口が設けられますが、東大和市域の人々は一滴の水も使うことが許されませんでした。

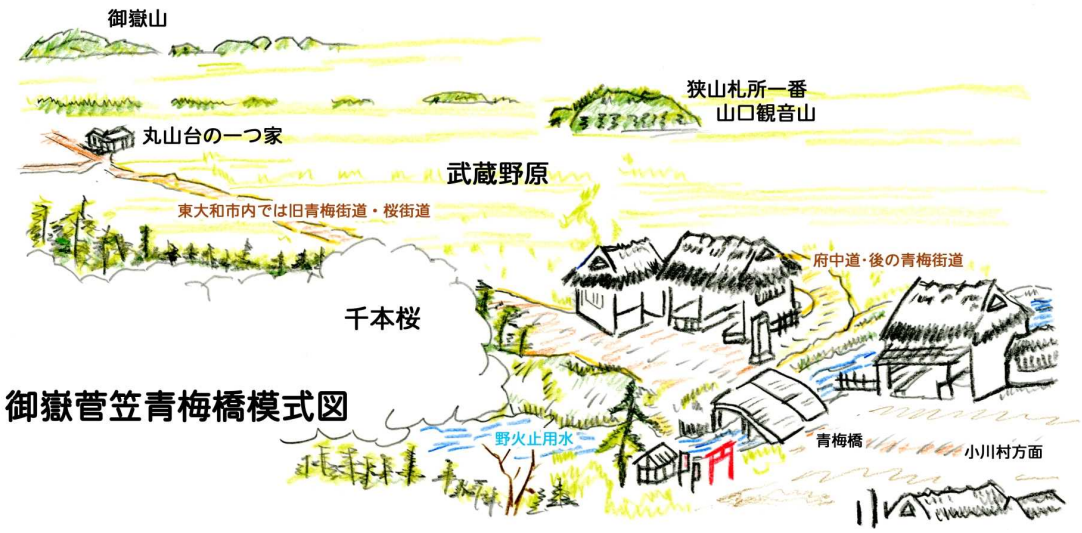


３ 小川村の新田開発

玉川上水、野火止用水の開削を機に、俄然、動き出したのが岸村（現・武蔵村山市）の小川九郎兵衛です。野火止用水の完成した翌・明暦 2 年(1656)、幕府代官今井八郎左衛門に新田開発の願いを出しました。箱根ヶ崎から田無まで無人の原野の中央、現在の小平市の位置に、石灰の継立場として、新田開発をしたいとの申し出です。

この申し出に対して、田無村から早速賛成の意思表示があり、老中松平信綱は「西は玉川上水と野火止用水の分水口より、東は田無村の方へ開発するように」申し付けます。開発当初は入植希望者は

少なく「九郎兵衛身上を掛け自分入用金をもって、」とあり、自己負担による開発の面もありましたが、1700 年代に本格化して、現在の小平市の前身である「小川村」が誕生しました。当初は井戸を掘る計画でしたが、玉川上水から「小川分水」を得て村づくりは進みました。



4 東大和市域の村々の新田開発

狭山丘陵の谷ッを中心に集落を営んでいた東大和市域の村人達も、一斉に南の原を開墾しました。

・芋窪村　万治元年(1658)立野地域(現在の上北台、立野)
・蔵敷村　寛文期(1661 ～ 1673　空堀川周辺？)、享保期（1716 ～ 1736　現在の東大和市駅付近）
・高木村　寛文 9 年(1669) 街道内(高木三丁目～仲原)
・後ヶ谷村　寛文 9 年(1669)江戸街道南（仲原・向原）　延宝 2 年(1674)堀際、水道際(向原)

赤土の舞う中を開墾し、おおむね 1600 年代末までには野火止用水際までに達しました。生活の本拠地を親村として開墾を進めたため、切添、持添新田と呼ばれます。その結果、21 ページ図のように境界の入り乱れた、南に細長い村々ができあがりました。一般に武蔵野の新田開発が行われるのは 1720 年、日本橋に新田開発奨励の高札が立てられたのを契機としますが、東大和市域ではその頃には新田開発が終了するか、終末期になっていました。

5 村の人口

東大和市域の村々の人口動態は江戸時代当初は不明です。後期になると次の表の状況になります。

文政 10 年(1827)人口

村　　名	家　数	人　数	農間渡世人	渡　　世（軒）
芋久保村	135	652	20 人	舛酒 4　質屋 2
蔵 敷 村	53	225	9	舛酒 3
奈良橋村	57	324	9	舛酒 3　質屋 2
宅 部 村	42	195	6	舛酒 2
後ヶ谷村	45	261	4	舛酒 1　質屋 1
清 水 村	57	295	10	舛酒 3

〈東大和市史 p203〉

表1　蔵敷村の人口動態

年代	家数	人　口	村内召抱	奉公出
		男　女	男　女	男　女
安永7	57	250（130　120）	8（2　6）	21（12　9）
8	〃	249（131　118）	7（3　4）	18（11　7）
天明1	〃	249（139　110）	8（6　2）	11（6　5）
6	〃	244（130　114）	5（4　1）	18（13　5）
7	56	229（121　108）	3（2　1）	16（9　7）
8	55	210（112　98）	6（3　3）	14（8　6）
寛政1	〃	219（112　107）	8（5　3）	16（12　4）
2	〃	218（110　108）	6（4　2）	15（10　5）
3	〃	218（116　102）	5（3　2）	12（7　5）
4	〃	213（108　105）	6（3　3）	17（12　5）
5	〃	216（109　107）	6（4　2）	15（10　5）
6	〃	218（111　107）	9（7　2）	12（6　6）
8	53	201（107　94）		16（7　9）
10	57	230（120　110）	8（5　3）	8（4　4）
11	〃	230（113　117）	7（5　2）	9（4　5）
12	〃	219	6（4　2）	11（7　4）

（『大和町史研究』1　関利雄「江戸時代後半期の農村人口」から作成）　東大和市史p178

個別の村で明らかな例を紹介すると蔵敷村があります。

安永 7 年(1778)　57 家族　250 人
寛政 1 年(1789)　55 家族　219 人
寛政 12 年(1800)　57 家族　219 人

別の資料により

天保元年(1830)　220 人
弘化元年(1844)　262 人

とあまり変化せず、出生が僅かに上回ります。

第2表　人数増減表（人別帳による）

	病死		嫁聟縁組				出生	
			他村より入村		出村			
	男	女	男	女	男	女	男	女
文化　2		1	2				6	3
15	1	1				1	1	
文政　3		1					3	1
4							3	
5	3	3		3		1	1	1
6	3	2		3			3	
7	1	1	1	3		2		
8	3	3				1		
9	2	2	1	2				
10	3	2		1		2	5	5
11	2	2		2		1	5	3
天保　2	2	3	1	2			2	5

大和町史研究1p55

家族	宝永 4 年	享保 14 年	天明 2 年	寛政 6 年	天保 12 年	明治 5 年
10 人					1	2
9					2	3
8	1		1	1	4	7
7	2	2	2	1	6	7
6	7	3	3	6	9	9
5	12	6	12	9	8	7
4	8	13	13	9	4	8
3	8	17	6	7	2	2
2	2	2	3	5	3	
1			5	7	6	
計	40	41	45	45	45	45

左の表は宝永 4 年(1707)から明治までの後ヶ谷村の世帯の人数と世帯数です。

宝永から寛政までは世帯人数は 3 人から 6 人が多く、天保以降 5 人から 8 人へと中心が動いています。

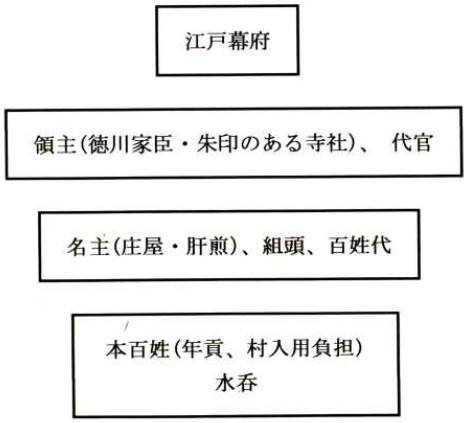
天明から天保にかけて 1 人家族が現れます。飢饉が続いた年です。

（大和町史研究 10p71））

6 村の姿・組織

東大和市域の江戸時代の村は水田が極めて少ないことと大部分畑作であったため、「山口領の悪米」とされ、年貢が金納であったことから、「農間稼」（のうまかせぎ）と呼ばれる駄賃稼ぎで年貢を納めました。そのため、江戸市中への活発な経済活動が行われました。清水村の天保 14 年(1843)の村明細帳の記録です。

「当村は古来より極めて困窮之村方で
・それぞれに持山並びに畔木(あぜぎ)等を伐って、炭や薪にして、馬で運んだり、河岸に出し、
・或は八王子、五日市、青梅、飯能等へ行って、炭薪を買入れ、馬で江戸表へ運んで、
・御屋敷様方へ納入します
・そこで得た「駄賃」で御年貢を納めています
・この馬で運ぶ方法は、夜の四ッ時(午後 10 時)に出発し、次の夜の五ッ時(午後 8 時)前後に帰宅します、
・女は農業の間に木綿縞を織出し、養蚕を営んでいます、
・誠に難渋之村方に御座候」



上の記録は清水村の名主が残しました。
江戸時代の東大和市域の村は
・幕府から領地を与えられた私領（領主）
・幕府の領地（代官）
に分かれました。それぞれに、
・直接村の仕事を受け持つ名主
・五人組の代表者(組頭)
・年貢の状況を農民の代表として監査（百姓代）
が置かれました。
村人達には次の層がありました。
・年貢を納め、村の費用を負担する(本百姓)
・上記をしない(水呑)